
三国志～外史を映す鏡～

霧咲作夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三国志〜外史を映す鏡〜

【Nコード】

N4223L

【作者名】

霧咲作夜

【あらすじ】

テンプレで死んでしまった後はテンプレで転生。そんなテンプレを集めたような作品です。

第 - 1 話 森の中の翁

ある山奥に一軒の家が建っている。その家の周りは深い森で覆われており、木々の間から注す木漏れ日こそが唯一の光源であった。

その家には今は一人の老人と幼い孫娘の二人が暮らしており、今は老人がロッキングチェアに座り幼い孫娘を膝に乗せながら昔語りを聞かせているところであった。

だが、二人しか居ない家に一人の若者が尋ねてきた。その若者は歴史の研究者であり、そのためにこの家の老人を訪ねたらしかった。

「ごめん、ここに歴史いし詠みの一族が居られると聞いたが、貴方がそうか？」

青年は老人に尋ねると

「ああ、よくおいでなさった」

と、青年を歓迎した。

「おじいちゃん？」

孫娘が何かを聞きたがっていたが

「先に家にお入り」

そう老人が答えるだけで、何もしようとはしなかった。孫娘が家に入るのを見届けてから老人が切り出す。

「今日は、どのような？」

それに対し青年は答えづらそうに言葉を重ねて言った。

「今日は、貴方に見てもらいたいものがありまして……わたしが思うに異なる歴史のものではないかと」

そう言いながら背負ったリュックサックから取り出すのは一枚の肖像画であった。その肖像画の被写体の名前は劉丙と書かれていた。

「お前さん、これをどこで？」

「四川省は綿竹に旧綿竹間の跡地より出土しました。紙質や使われた塗料から恐らく今よりおよそ1800年は昔に、そう三国時代の産物である可能性が非常に高いのです」

老人の問いに青年ははっきりとした口調で答えた。

「そうか……………これはな、そなたの思っている通り、異なる歴史の産物。所謂外史と呼ばれる私達から少し歴史の歩みの違った場所より世界を渡ってきたのだらう。」

「やはり、そうですね」

青年は既に9割がた確信していたのだらう。

「間違いはないさ、この劉丙と呼ばれる人物はこの世界では 存在しない のだから」

老人はそう断言すると家へと向かった。

「着いて参れ」

そう呟く様な小さな掛け声を青年は聞き漏らさずに、老人と共に家の中へと入っていった。

家の中に入ると、青年の胸に檜の香りがストンと入り込んできた。

「こつちだ」

老人を先頭に進んでいくと老人は壁の中にずるっと入り込んでいった。青年は驚き口にまで出掛かった悲鳴を飲み込むのに必死だった。

「はよう来い」

その老人の声とともに壁から老人の腕がにゅるっと生えてきたかと思うと、息も着かせぬ間に青年の腕をひっぱり、青年は壁の中へと消えていった。

「ここは……………」

青年が目を見開くとそこには大きな水瓶が一つあるだけの簡素な石造りの部屋だった。今までは木造だったのにここだけ石造りなため、青年は酷く寒気がしたような気がした。

「ここは歴詠みの部屋じゃ。本来は人を入れることはないのだが、

外史に関わる物品を持つてきているのだ気にする必要はない」

そう言いながら青年からその肖像画を受け取ると、その水瓶の中に入れてしまった。

「ちょ、ちよつと何を」

「いいから黙って居れ」

青年の抗議を無視して老人は何事かを呟くと、水瓶の中は光り輝いていた。

「こ、これは……」

青年は呆然としながら呟くと答えはすぐそばから返ってきた。

「これはね、歴史の流れから取り残されたものや違う歴史からきたものを映し出す鏡みたいなものかな？」

青年が後ろを振り向くと先ほどの女の子が壁からやってきた。

「鏡？」

青年は何がなにやら全くわからなかったが、何かが分かるという漠然としたものを感じていた。

「一つだけ、訂正が有る」

老人から不意に声がかかった。

「この水瓶は所詮昔話をする程度の物だ」

「昔話？」

青年は余計に混乱してきた。

「昔話って、この水瓶がなにか語りかけるのですか？」

そう青年は思ったことを口にした。

「そうではない。この劉丙という人物の生を映す程度の事しかしないという事だ。そなたが気になっている時代背景やこの劉丙という人物を取り巻く環境・人物を無視している」

そう老人が青年に声をかけていた。その一方で老人の手はせわしなく動いていた。何に使うのかさっぱり分からない粉末やら、液体やら黒こげた物やらが次々に水瓶の中に投入されていく。

「さて、青年よ。これは劉丙なる人物が三国時代という名の戦国時代を駆け抜ける英雄叙事詩になるか、それとも盛衰記になるかは分

からんが見て行くか？」

老人は幾分若返ったかのように詠うように青年に語りかけていた。
「此処に来た数多の人達は此処で帰ると言った方は今までにいましたか？」

そう私は答えた。

「なるほど、それでは見ていこうかの？この劉丙なる人物を」

老人が楽しそうに詠いながら何やら粉末を水瓶に入れた。老人は聞きなれない言語で何事かを呟くと、水瓶の中の光は徐々にその強さを増していった。

「うわ」

あまりの眩さに青年は思わず目をつぶってしまった。

劉丙とは一体誰か、この光が何を起こしているのか、何も分からぬまま物語は進む。

第・1話 森の中の翁（後書き）

はじめまして、この作品が処女作となる霧咲です。

まずは、導入部分のさらに導入部分なため、三国志のさの横棒くらいしか出てませんので、なにこれー？な物になっちゃってます^^；
もし誤字脱字や表現の仕方などあればご教授の程よろしく願います。

第0話 転生はテンプレートの様に（前書き）

この小説は横山三国志をベースに（恋姫要素＋演技）÷2的な作品
となっております。

第0話 転生はテンプレートの様に

今俺は自分と向き合っている。といっても、鏡を見てるわけでも自分の内心と向き合ってるわけでもペルソナでもない。

単純に自分の身体を見ている。

さて、どうしてこうなったんだか。

某日某日

突然だが、俺の名前は小谷竜平19歳。職業はフリーター兼パート兼派遣社員兼家庭教師だ。家庭教師といっても、近所の小学生共の勉強を見てやってる程度で、教員免許を持つてるわけでもなければ、教育大学に通ってるわけでもない。

ただ、近所の20以下では俺が一番年齢が高くて、ほかは全員小学生だっただけの話だ。

まあ、そのおかげでおかずにだけは困ったことが無いというのが一人暮らしの身としてはありがたい。

しかも、やってる内容は俺自身の趣味が9割9分で1毛くらい教科書を使い、残りはただ、妄言を垂れ流してるだけ(と22歳の某大学の院生試験に合格した近所のおんちゃんに言われた)という酷い有様だが、俺よりも頭のいい小学生共(泣)は勉強の合間の休憩程度に聞いていてくれる。

そんなこんなで今日も吉雄君(9歳：現在微分積分を勉強中らしい)と勇太君(8歳：現在通訳案内士(英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、中国語)の勉強中らしい)と彩華ちゃん(10歳：現在薬剤師になるための勉強中らしい)と俺(現在定職につかず)の4人で仲良く勉強(?)を行うために移動中であつた。

だが、交差点で信号が赤なので止まろうとしたのだがなぜかバナナ

の皮が落ちてあり、かつ俺は横を向きながら（いい子は前を向いて歩きましょう）歩いていたのでそれに気づかずそのまま横断歩道の少し手前で止まろうとした。

お約束というべきか、バナナの皮を踏んでしまいつつと滑った。

そしてトラックの目の前に躍り出て…… どん。

そんな感じだったのだが、痛みとか走馬灯とかそんな物無視して幽体離脱をしてしまった。そして、俺の見る前でゆっくりとトラックが身体に接触し、接触した箇所からスローモーションで身体に波紋が広がりこれまたゆっくりと身体がぶっ飛ばされていった。その身体は3回ほどバウンドして派手に血と脂と肉と内臓をぶちまけながら、滑るように飛んでいき…… 50m程もあるだろうか、次の交差点のと真ん中で右折しようとしていた車のドアにぶつかってようやく止まった。その後、その車の運転手は恐怖に駆られたのか急発進…… 周りの車に体当たりを繰り返すこと3回、ぶつかった車の後ろから走って来た車に追突すること5〜8台分。2〜3台目にあった車は前後から挟まれて完全にスクラップ。ついでに中に乗っていた人達は首が無かったり、背中から肋骨が飛び出たり、2mくらい離れたところに手足が飛んでいたり、と一昔前のスプラッタ映画も真つ青な玉突き事故が発生。

辺り一帯は、騒然となるどころか阿鼻叫喚の大渦に叩き込まれ、幽体離脱して、端から見ていた俺は、ちよつと引いた。

義男君たち3人は恐怖に顔を引きつらせながらも110番+119番。俺はバナナを皮をそこに捨てたのは誰だろうと見当違いの考えに没頭中。

そんな混乱と恐怖とスプラッタとその他もろもろが渦を巻いているところに奴は現れやがった。

「むおおお。」

謎の奇声を発しながら

「それはちと酷いんじゃないかい？」

と、俺の心を読んだように

「いや、声に出してるし……」

なんと、知らないうちに声に出していたらしい。

「いつから声に？」

これだけは聞いておかねばなるまいと思いながら。

「ふむ、某月某日の件からじゃな」

なんと、最初から声に出していたらしい。

「ところで、何故俺は死ぬ直前からいままですつと幽体離脱をして
いるんだろう？」

「うむ、ちと手違いがあつての」

俺の問いにそう答えたのが……誰だ？こいつ？

「今更だが、あんた誰？」

このボケ老人は一体なんなんだ？

「わしは神じゃ」

「ああ、ペイパーか」

思わず反射的に答えてしまった。

「いや、I AM GODなのじゃ」

「どこかで俺が言ったような台詞だな」

あれはたしか……駅前で宗教勧誘してる奴に言ったんだっただかな。

「あなたも、神様を信じてみませんか？」

つて聞いて来たから。

「I・m god（俺が神だ）」

つて答えたんだっただか……。

「いや、本当にすまんのう」

確かそのときの奴の顔が面白かったのは覚えてるなあ。

「……無視か？無視なんじゃな？」

「こいつうぜーな」

つて感じだった気がする。

「酷い」

だから、思わず。

「神様の目の前に送ってやろうか？」

って言ったんだっただか。

「……なんか色々と面倒くさくなったのう。色々な特典をつけて好きな世界に飛び……げふげふ。行かせようと思ったけど止めましょう」
確か、その後は殴り合いの喧嘩になったな。こう鳩尾をえぐる様にアッパーをかけて。

「ぐほうあ」

足を浮かせた後は斜め上から振り下ろすようにハイキック

「あべし」

で叩きつけた所で……

「うぐう、まさかここまで人間にやられるとは、もう怒った」

俺は穴に落ちた。

俺が最後にみたの何故かぼろぼろになっているはしわしわの爺が怒ってたってことだけは覚えている。

謎の黒い穴に落ちた隆平の運命や如何に。

第0話 転生はテンプレートの様に（後書き）

ということ、ようやく普通（？）のプロローグ的な物が出来上がりました。

筆者はパソコンの前に70分しか座らせてもらえないため、パソコン投稿なのに1話1話が非常に短いのです……

なので、その辺はご容赦を

誤字脱字、文章表現等おかしい点があればご指摘していただけると幸いです。

第1話 赤ん坊とか大変なだけですよう

現在、ものすごい速度で落下中。

右も左も上も下も前も何処を見ても真っ黒だが、体感的に落下中とだけわかるのだが、正直飽きてきた。

なんせ、体感時間で30分は落ち続けてるのだ。しかも何処を向いても黒なので精神的にくるものがある。さらに体感時間で20分くらい経った頃だろうか、漸く黒以外の物が下から凄い勢いで近づいてくる。とはいえ、俺自身が落ちてるから、実際は俺の方から近づいているんだらう。さて、その黒以外の物とはなんと白い線だった。まだまだ先にあるので詳しい事は解らないが幾何学的とでも言えばいいのだろうか？それともアニメの黒魔術的魔法陣っぽいといえればいいのだろうか？そんな感じの線が、徐々に近づいてくる。

そして、ようやく手の届く位置に來るとそれは謎の発光を繰り返して、その魔法陣から放たれる白い光に包まれると思ったらしいの間に意識を失っていた。

再び目が覚めると、俺はまた暗い空間にいた。先程と違うのは、落ちていない事。狭い事。そして柔らかな壁のような物の向こう側から音がしてくる事であった。

その音に耳をすませると、何らかの会話のようであった。俺には意味が通じないが、間違いなく何らかの会話であった。それも、中国語だ。それが中国語だと気付いたのは単に勇太君のお陰だらう。やつは何故か中国語を勉強していて、それを覗いた時に聞こえてきた単語がいくつか出てきたためだ。

そんな状況がおよそ1月続いたある日のことだ。此処までの間に俺は幾つかの状況を想定していた。その中で最も有力なのが、俺は胎児であるという物だ。もし俺が胎児に鳴っているのであれば全ての説明が付くという物だ。問題は日本人の俺が中国人に転生したと言ふ事だろうか？農薬満載の野菜は食べたくないです（切実に）。そんなくだらない事を考えていると、母親となるべき人が産気づいたのか苦しみだした。何度が狭い穴に押し込められそうになったが、穴が小さいのか全て入り口の部分で戻される。10回目くらいだろうか？狭い所を無理矢理通るような感じで俺はこの世に生誕した。

俺のこの世界での名前は毘斗という名前だ。なんでも幼名という物らしい。そして、俺の父親は劉備玄德という人だ。そうあの三国志において巴蜀一体を治めた皇帝劉備である。これには俺も驚いたのだが、自分の名前に驚いた。たしか、劉備の第一子の幼名は阿斗ではなかっただろうか？そして、2代目蜀漢皇帝劉禅だったはず。さらに、俺が覚えてるK O U E Iの名作『三国鼎立』の知識によれば毘斗なる人物は劉備の息子には居ないはずなのだ。俺が生まれたのは191年の9月。この時期は劉備が平原国の相になった辺りだ。もしかして、K O U E Iの名作『三国鼎立』には毘斗という人物が居ないのかもしれない。もしくは曹操の息子曹沖のように若死したのか。だが、『三国鼎立』では偶にS P武将としてそういった武将や、果ては靈帝といった、皇帝は勿論、女性（劉備の妻・糜夫人《糜竺、糜芳の妹》や穆皇后呉氏《呉懿の妹》や、K O U E Iオリジナルとして呂玲綺《呂布の娘》等）や、古の武将（漢朝の高祖・劉邦や天下無双の武人・項籍《項羽》等）まで武将として登場する事がある。さらには異民族の襲来を防げば一定確率で異民族の将すら配下にするこ

とが出来る作品まである。

だがしかし、毘斗なる人物は一切出てきてないはずである。更に言うなれば、この時期に劉備に子供がいる事自体おかしい。

本来、甘夫人を妻としたのは194年である。糜夫人を妻としたのも同じ頃。なのに俺の母親は甘夫人というらしい。

色々と考えていたら、頭が痛くなってきたのでそろそろ寝ようと思う。

翌日起きたら、すっかり頭痛はとれていたが、思い出した事がある。翌年192年の春、秋にかけての間に父の配下にと推挙された劉平という平原の知者が父を暗殺しようという行動するはず。しかしその時は身軽だったため、運良く逃げ延びている。だがしかし今の父は妻子、それも1才になるかならないかという幼い子供がいるので、暗殺の手から逃れる事が出来るかどうかは非常に微妙だ。劉平という人物が何もしない事を祈るしかないか。

何をするにしても、俺はまだ幼いので何も出来ないという事以外に結論が出ないというのが問題だ。早く大人になりたい。

第2話 針の穴を通る

第2話 針の穴を通る

192年の初春（3月頃）劉備（以後父上）は、公孫サン（サンは言贅と書くが変換できないorz）と同盟中の袁術と河北の雄・袁紹が決裂した。

これに伴い、公孫さんのもとに身を寄せている父上は袁術の要請を受け、袁紹との戦いは前年の青州刺史田楷・劉備連合対袁紹戦以上の激化が進んでいった。

当時の袁紹軍は、191年に謀略でもって韓馥を下し、冀州を手中に収めていたが、袁術は幽州・青州・徐州、そして冀州の一部を固め取り、河北一の名はなくとも実はあったのである。

191年の終わりごろには、袁術・陶謙と共に半ば袁紹包囲網を布いていたのである。だが、192年のはじめごろ劉虞を皇帝にするかどうかで袁紹と袁術の関係は修復不可能なまでにズタズタに引き裂かれ、この件を持って袁紹対袁術の戦いの火蓋は切って落とされた。

袁術は対袁紹包囲網をより完璧にする為に、人事異動を断行した。その中に父上も含まれており、1月以内に高唐へと異動することが決まった。

この時、俺の恐れる事態が忍び寄っていた。

4月の始め、父上は関羽將軍や張飛將軍、簡雍様、田豫様と連日のように話し合っていた。この時の議題は、高唐への異動と引継ぎについてだったと思う。父上の横で寝ぼけ眼ではあるが、座って話を

聞いていた。周りの人が止めるかとも思っていたのだが、子供だからだろうか？それとも、そんな事にかまう事ができぬほど忙しかつたのか？それはわからないが、兎に角何も言われずに今日の会議に出席していた。

会議も佳境に入ろうか、という時に一人の兵士が現れたのである。

「失礼します」

その声と共に現れたのは、現在警邏中の兵士だったように思う。なんせその時の俺は半分以上寝ていたのだから覚えてはいない。その後幾ばくかのやり取りがあつた後、一つの言葉が俺の耳に入り込んだ。

「――、劉平と言います。この度は劉備様の」

この言葉に俺の意識は完全に覚醒していた。なんせ、何時暗殺されるのか等と考えながらこの先最大で1年間は生きていかなければならないのだから。

残念ながら、今現在の読解力では劉平の言葉が難しくて理解は出来なかったが、その辺は俺の無い頭では仕方が無いと思う。

そうこうしているうちに、高唐への出発準備やら何やらに父上が追われてこの2週間ばかりは父上とは会ってすらしていなかったが、出発前日。嫌な予感が俺の脳裏に走り抜けたので、俺は無理やり駄々をこねて（泣き叫んで）父上と一緒に眠ることに成功した。その時の困った顔は俺の中で永久保存して、後で配下となるであろう人達に語りつくしてみようと思う。

そして、正にその日であつた。劉備暗殺。この時のために俺は昼間はぐっすりと熟睡し、夜はおめめぱっちりの状態であつた。そして俺は小さな物音と聞き取りづらいがわずかに聞こえた「確実に殺せ」、「手はずどおりに」等の言葉が聞こえてきた。

そして、5名くらいだろうか？暗闇に乗じて父上の寝室へと侵入してきた。そして正に最高のタイミング、最大の音量、喉の限界に挑戦するが如く……俺は号泣した。それはもう絶叫とか悲鳴とかそんなレベルでは済まされない声と甲高さ。さらには赤子の鳴き声特有の脳みそにまで響いてくる甲高い声というのも生易しい音の暴力ともいうべきものを口から発した。

それに気付き、すぐさま関羽將軍・張飛將軍、田豫様が駆けつけてきた。その音に父上も何か異変に気付いたのだろうか？抜剣しており、一番近くにいた侵入者は耳をふさいで棒立ち、後に続く侵入者たちも耳を塞ぎながら歩くのが精一杯の状況であった。

その後なきつかれたのか俺は爆睡し、後には何が起きたのかわからなかったが父上が生きているので何とかなったのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4223/>

三国志～外史を映す鏡～

2010年10月13日20時10分発行